



国際ロータリー 第2780地区 第9グループ
湯河原ロータリークラブ 週報

2024年5月17日(金) 第2963回例会 形式:対面 天候:晴れ
合唱:我らの生業



世界に希望を生み出そう

会長 佐藤 友彦 幹事 櫻井 武志

事務所:神奈川県足柄下郡湯河原町宮上 566 湯河原温泉観光協会

TEL 0465(64)1234 FAX 0465(63)1716 例会場:ニューウェルシティ湯河原 例会日:毎週金曜日 12:30~13:30

会長挨拶

佐藤 友彦

皆様、こんにちは。本日もお忙しい中、例会にご出席賜りまして誠にありがとうございます。

今週はロータリーにおける政治の取り扱いについて、十分に理解をした

うで中立な立場として少しお話をさせて頂きたいと思います。今週末に小田原市長選挙が行われますが、現職市長と元市長との一騎打ち、また大激戦が予想され全国的にも注目されている地方選挙のひとつです。4年間の実績を最大限にアピールして町の経済的な発展から市民サービスの拡充を目指す現市長の政策と市民生活に重きを置き市民ファースト的な政策を掲げる元市長。それぞれの政策公約を拝見して感じたのは実績を掲げるのもこの先実行する政策も具体的かつ実行可能なものではないといけませんもう少し見て読んだ方々が希望を持ち可能性を感じるような部分があれば良いと思いました。当然ながら責任が伴うものなので簡単な事では無いと重々承知はしていますが、政治への不信感をはじめ未来への希望が見出しにくい混沌とした現在だからこそトップリーダーになる方には是非、人々が可能性を感じる、覚悟に裏付けられた強いメッセージを発信して欲しいと改めて強く感じたところです。

また、ポジティブ、ネガティブの両面において SNS での情報発信の影響は凄まじいものがあると改めて感じました。今の世の中、ありとあらゆる面で SNS の活用は必要不可欠ではありますがいろいろと考えさせられることもあるのが現実であります。また我が町においても富田町長のご逝去にともない来月には町長選挙が行われます。是非、私たちがこの町で商いをしこの町に生きる一人として次代のトップリーダー像について考える必要があると考えます。

簡単ではございますが本日のご挨拶に代えさせていただきます。ありがとうございました。

幹事報告・連絡事項

なし

スマイルボックス

入会記念日 深澤昌光君(13年・H23.5.13)

入会記念日 石川博君(13年・H23.5.13)

出席報告

ゲスト 1名 ビジター 0名

会員 22名 欠席3名(免除者0名)

出席率 86.36%

前回の修正出席率 81.82%

前々回の修正出席率 81.82%

事前メイクアップ 1名

ゲスト 龔 俊鏗 君(米山奨学生)

卓話

石川 博 君

「ある湯河原温泉史(著:大山正雄先生)」より

湯河原温泉の歴史的地理的概要

湯河原は静岡県の熱海市と接する神奈川県西端に位置し、北西を箱根山、南東を相模湾(太平洋)に開口している湯河原火山の標高600~1000mの外輪山に囲まれた開析カルデラと箱根火山東麓、および海岸沖積地を町域(40.7km²)としている。湯河原火山は隣接する西の熱海が多賀火山より新しく、北の箱根火山より古く65万年前ごろの活動と安山岩よりなる円錐形の成層火山である。その中央火口は著しく解析・拡大されたカルデラ状低地となり。中央部を東に流れる藤木川(落合橋下流から千歳川)が湯河原火山の基盤をなす湯ヶ島層群を温泉場で露出させている。湯ヶ島層群は1600万~1000万年前の海底火山の玄武岩や安山岩から成る海底堆積物の緻密な地層である。湯河原温泉の大部分はこの湯ヶ島層群の亀裂に胚胎し、無色透明の90℃近い温泉を湧出している。湯河原は江戸時代には土肥 6ヶ村(宮上、宮下、門川、城堀、吉浜、鍛冶屋)と称していたが明治 22(1889)年 4月の町村制により湯河原カルデラ内の宮上、宮下、門川、城堀

の4ヶ村が土肥村となり、大正15(1926)年7月に湯河原町、昭和30(1955)年に海岸沿いの吉浜町(吉浜と鍛冶屋)、福浦村とが合併して現在の湯河原町が誕生した。

今から1300年前の奈良時代(710~784)に編集された「万葉集」十四巻東歌に「足柄(あしかり)の 土肥の河内にいづる湯の 世にもたよりに 子ろが言わなくに」が記されている。この一首は万葉集約4,500首の中で温泉が湧き出る様子を歌った唯一のものである。湯河原地方はその頃から土肥と呼ばれていた。土肥郷の中の一つが下記3温泉の自然湧出していた宮上村である。

湯河原の地名は湯(温泉)が藤木川の河原に湧出していたことに由来すると考えられるが、記録の上では「宮上村明細帳」の寛文12(1672)年の記が初見である。

江戸時代後期の天保12(1842)年に完成した地誌「新編相模国風土記稿」によれば天保年間(1830~43)頃の湯河原温泉は海岸から4km程入ったカルデラ底中央の宮上村の東流する藤木川の河原に自然石で設けられた浴槽の”前ノ湯”と”下ノ湯”、右岸側の山の麓の天然の窪地をなす巨石を浴槽とする”ママ子(ネ)湯の3湧泉のみであったが、今日では海岸沿いでも温泉が開発されて廃孔と休止源泉を含めると2020年時点で194(利用78、未利用34)源泉に達している。

ママ子湯(ままねの湯)は後に“上の湯(こごみの湯)”、前の湯は“中の湯”とも称している。また、ママ子湯は明治19(1886)年発行の「日本鉱泉誌 中巻」(内務省衛生局、1985)によれば儘根ノ湯と記されている。ママが南関東で広く使われている崖や急斜面を意味し、子(ネ)は根元を意味することから、ママ子湯とは崖下に湧いている温泉に由来する名称であろう。

湯河原温泉は古代から、そして、その効能は刀傷などに特に著しく、打撲・損傷・化膿などにもよく効くと中世には知られていた。戦乱のたびに負傷した将兵がやってきて治療し、鎌倉時代から最高級石とされる隣接する真鶴の小松石や小田原の根府川石の採石場などで働く近在の石工がけがをした際の養生にも欠かせなかったと言う。(湯河原町町史編纂委員会1987)

江戸時代には湯河原温泉を四斗(しと)樽(約72ℓ)に詰め熱海港から海路で送られていた。江戸時代後期の文政(1818~29)の頃には神田、浅草、京橋、赤坂などでの12店で薬湯として販売され、店の入り口には「湯河原湯」といった看板を掲げていた。(熱海市史編纂委員会1968)。そして値崩れを防ぐため、湯河原温泉の薬湯は宮上村の亀屋源次郎が一手に取り扱うことを宮上村湯河原の名主と江戸商人との間で文久元(1861)年に取り決めている。(町史編纂委員会1984)

全国の温泉地を格付けした江戸時代の文化14(1817)年

発行の温泉番付「諸国温泉効能監」によれば、湯河原温泉は江戸より約20里(約80km)“切り傷に吉”とあり、東の温泉番付の草津、那須に次ぐ3番目の小結の座を占めていることから、確かに薬湯として評判であったと推察される。

当時の湯河原は「新編相模国風土記稿」によれば「此の地の温湯・治効は箱根・熱海の泉と伯仲すれど、僻地で山川の景勝も少なく諸事自由にならず。また静かで寂しさに耐えられず遂に飽きて長く留まる者少なし。」と評され、しかも海沿いを通る小田原との間の熱海道(往還)の行路が険しい上に箱根関所に次いで重要視されていた根府川関所が元和元(1615)年設けられていたもので、小田原から江戸方面の人々の湯治を困難にしていた。明治14(1881)年に熱海・小田原間に県道が完成したが、それでも明治26(1893)年、この道の様子を記述した陸軍の報告(副島、1896)によると”道路ハ山道ニシテ海浜ニ沿い、一高一低敢テ陰阻ナラサルモ石多ク凹凸、降雨ノ際ハヌカルミ甚ダシク人車ノ交通大ニ困難ナリ”とある。

明治2(1869)年に関所が廃止され、明治20(1887)年に小田原の手前(東)の国府津まで延び、明治29(1896)年に湯河原経由の小田原と熱海との間に人の押す人車鉄道(1907年に軽便鉄道)が、明治33(1900)年に小田原経由の国府津と箱根湯本との間に小田原電気鉄道が敷設され、交通の便は少しずつ良くなっていた。

また、湯河原温泉は、「全ての傷に特効あること日本国中之に並ぶものなし」(加藤1985)とのかねてからの評判と温泉の湧出する湯河原火山カルデラが暖流(黒潮)の流れる南東の相模湾(太平洋)に向かって開口して冬季の気候も温暖なことから陸軍の傷病兵の療養に利用されたので名を一層高めることになった。ちなみに、陸軍転地療養所での測定によると、明治41(1908)年12月から翌年1月の2ヶ月間の湯河原の平均気温は9.7℃で、東京における期間の3.1℃と比較すると平均6.6℃も暖かい。

大山正雄先生の略歴

1970年に神奈川県温泉研究所(現神奈川県温泉地学研究所)入所以来、箱根、湯河原などについて研究をされました。特に1950年頃よりの温泉井戸開発のため枯渇寸前だった湯河原温泉の実情を約4年にわたり調査実証し、「湯河原温泉の水位の変遷」(大木靖衛氏と共著・1974年)、「湯河原温泉の水位と湧出地域の透水性」(1976年)として発表されました。湯河原温泉の温泉水源保護の基準を示された功績は大変大きなものと思われまます。神奈川県温泉地学研究所を退職後は、日本温泉協会会長などを歴任され、現在は日本温泉協会相談役に就任されています。